

年にポッツヒルにあった初代クリスチャンゼン干渉計(東西方向に3'の分解能をもつ)を使い太陽のS成分の“2次元”マップを描き世界をアッと驚ろかせた。地球の自転によって干渉計基線が回転することを利用し、時間変化の少ないS成分を数時間かかって観測し、分解能3'×4'の2次元の絵を得たのであった。いわゆる rotational synthesis の元祖である。

現在次の三つの方式で太陽および宇宙電波の観測を行っている。① 32×32の2次元観測、② 32×2の東西方向のみの複合干渉計、③ 東西方向の複合干渉計を使った rotational synthesis、③では各アンテナの組み合わせに対して64組の相関型受信機を用意し、64個のフーリエ成分を同時に得ている。したがって広い天空領域が同時に観測されるのできわめて能率がよい。太陽電波の観測は①および②の方式で行なわれ、S成分の一次元および二次元のマップは Solar-Geophysical Data に公表されている。

これだけ立派な観測装置を持っているにも拘らず、太陽物理に興味をもつスタッフが少なく余り結果が発表されていないのは残念である。

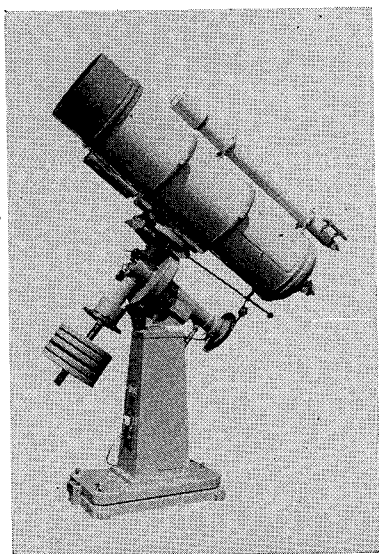
オーストラリアでは大学における研究は伝統的なCSIROに比べると一般的にやや低調である。この数年大学での研究を充実させようとする動きがあると聞くが、予算と人の面で、CSIROと比較すると、恵まれないようである。

R CrB の減光

変光星 R CrB は不規則に急激な減光を示す変光星の代表としてよく知られている。前回の極小は1972年3月に、アメリカの Hodgson によって減光に気づかれたもので、1972年3月25.9日(U.T.)には11.6等(眼視)まで減光したのが観測されている。今までの観測によると周期、継続時間、変光の幅なども不規則であった。

神奈川県湯河原の神田茂氏の連絡によると、1973年12月18.8日(U.T.)に仙台の細川氏は減光に気づき眼視等級で6.6等と観測している。その他、12月22.8日7.1等・細川、23.8日7.1等・重久、24.8日7.2等・浦田、25.8日7.6等・五味、26.8日8.0等・五味などの国内での観測が寄せられている。スミソニヤン天文台からの電報によると、Hodgsonが前回に引き続き今回も12月22.5日(U.T.)に6.6等で観測している。

(香西洋樹)



天体望遠鏡
ドーム、製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|---------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東京大学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・チェゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリウス大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 **西村製作所**

TEL. (075) 771-1570
691-9580